トップアスリート研究
～５１歳安福洋一　Ｓ級競輪選手の３２年間の分析～

Research into the top of “Keirin” athlete
~how to keep going in the velodrome for 32 years~

1K06B225　　安福　洋徳
指導教員　主査　太田　章先生　　副査　村岡　功先生

【緒言】
私は将来競輪選手として頑張っていこうと思っている。競輪選手は高校卒業から受験することができる。だが私は体も小さく他の選手よりも小柄なので競輪界でやっていく自信がなかったので高校卒業後はすぐには競輪学校を受けなかったのだ。大学に進み経験と知識をつけて競輪学校を受験しようと思ったのだ。大学では着々と競輪のための練習をしていき、実績も残してきた。ほんとうにここまで並々ならぬ努力を重ねてきた。一方、私の父（安福　洋一）は競輪界で 32 年もの間競輪のトップクラスでやってきたのである。私はなぜ父が 32 年間もこの世界トップクラスで走り続けることができるのか疑問に思い今回のテーマにしたのである。

【第１章　競輪とは】
競輪は 60 年前に日本で生まれ発展してきたのである。競輪は数ある中のスポーツの中で一番選手数の多いスポーツである。
競技はバンクと呼ばれるすり鉢状のコースを 4 周～9 周（基本は 2,000m、但し GI 決勝や KEIRIN グランプリではそれ以上）し、通常 9 人で行われる。

【第２章　競輪選手になるためには】
日本競輪学校に入学し、選手資格検定に合格する必要がある。第 1 次試験と第 2 次試験が行なわれ、第 1 次試験は実技のみ、第 2 次試験は実技試験のほかに面接も行なわれる。なお受験の際には、適正試験（自転車競技以外のスポーツから受ける試験）技能試験（自転車経験者が受ける試験）の２つがある。

【第３章　安福　洋一について】
　安福洋一・・・現在競輪界で、オールスター２２年連続出場の経歴を持ち、２６年もの間トップクラスで走り続けている選手である。また、私の父でもある。

【第４章　父の自転車競技のこだわり】
　父がこだわり続けているのが、サドルである。父はサドルについていろいろと悩みながらも、こだわりを持ち続けている。

【第５章　３２年間の競輪の成績】
競輪というのは、1 年間で 70～80 回レースをすることになる。父は、この過酷なスポーツを 32 年間続けてきたことになるのだ。今まで父が走ってきたレース数は 2470 回になる。その 32 年間のデータの成績の統計をだし、比較してみた。

【まとめ】
父は３２年間競輪をやってきて５１歳まで競輪のトップクラスに居続けてきた。練習の仕方を考え、競輪の部品にこだわり、悩みながらも、

一つずつ答えを出したのである。そしてそれを繰り返すことによって父は進化し、強くなり続けてきたのである。それがたとえ40歳を過ぎようと、父は常に強くなることだけを考えてやってきたのだ。父は、競輪に対する思いも人一倍強いと思う。父には若い時から「トップクラスで長い間活躍する。」という大きな目標があり、その気持ちを常に持ち続けたことが、長く選手生活を続けてこられた秘訣なのではないだろうか。また父の目標は、日本一になることでもある。結局目標は達成することはできなかったが、その目標を持つことにより、肉体的、年齢的な限界を超えるエネルギーが生まれたのだろう。そして、父は2009年の12月30日に京王閣競輪で最後のレースを走り、３２年間の競輪競技生活を終える。